



中村俊定文庫
文庫 18
277
2



風俗文選拾遺二目録

飲食四季の文
幽霊の呪
招針招小木の辯
市中の舞
生酔の呪
好悪の辯
續歸去來の辯

安方の頌
送猫児の書
七首の論
百鬼行
療病の論
槌打の舞
夏腐の賦



婚前の小娘、切飯、紅の元坊を死、むらもい妻の眞之鏡の書
め、お和布の美味物、抱うさぎの切、え二月、葉もふかく、卯月と
あり、卯の地、恒小、咲て、新茶の、餅、く、遠く、時、志、各、松、魚、の、如
し、唯、小、貴、筍、ハ、羨、い、け、く、蒸、ハ、汁、ふ、等、じ、葉、ハ、餅、ハ、茶、を、九
花、枕、ハ、餅、ハ、文、白、粉、も、か、ま、て、梅、餅、と、梅、餅、も、ま、じ、新、麦、ハ、か、て
と、う、け、を、す、也、果、松、茸、の、海、り、若、也、じ、蕪、菜、の、何、元、物、白、瓜、ハ、も
ま、れ、て、名、を、い、げ、お、子、ハ、鴨、焼、に、卷、有、車、屋、心、た、白、雨、宿、の、席、夕
河、原、の、小、餅、敷、を、色、の、葉、食、あり、極、暑、の、後、ご、さ、白、首、水、及、湯、の、力
を、斬、こ、之、仗、の、屋、飯、ハ、孝、治、と、好、小、梅、ハ、葉、穂、ふ、深、く、熱、瓜、井、戸
お、さ、が、お、粥、秋、丸、も、ま、さ、七、支、丸、お、ぬ、い、お、素、巧、の、定、日、り、六、七
度、喰、て、七、度、水、を、浴、と、あ、は、え、葉、茸、と、食、の、う、ま、し、金、と、い、は、葉、丸
飯、干、餅、生、尼、美、の、統、統、つ、り、之、冷、毒、秋、も、ま、じ、月、尾、を、い、有、喰
り、重、歩、を、後、ひ、雨、や、り、子、月、の、如、く、な、く、芋、此、の、も、う、ま、し、は、秋、の
葉、の、葉、丸、ふ、り、く、地、下、の、葉、を、使、て、い、り、り、餅、け、も、ぬ、ん、と、表、れ、も
滑、さ、れ、る、は、比、較、と、い、物、の、世、も、い、う、ま、が、ら、れ、た、葉、の、む、じ、は、ま、は
心、を、丸、れ、餅、と、い、物、も、又、ま、ま、物、ハ、餅、と、い、物、を、脂、も、の、つ、て、ま、り、也
お、安、く、下、さ、ぬ、の、人、の、足、も、入、安、く、お、毎、に、お、せ、ら、れ、ら、い、と、い、物、あり
お、月、丸、と、い、て、湯、と、い、又、飲、管、也、し、葉、酒、不、碎、て、ハ、ご、を、巻
お、葉、丸、飯、不、飽、て、ハ、飯、を、あ、ぐ、干、之、後、丸、葉、と、葉、丸、の、名、を、呼、れ、芋、丸
衣、丸、を、呼、れ、柿、丸、漬、ぬ、け、梅、丸、赤、く、支、の、子、丸、新、葉、丸、飯

昔の二

三

ては月廿二日高あは夷海として飯と志のちを中言とにわね
いすまはれをげく細互けの朝葉吹の夜いづねもくまひ
おく初雪のまきさき大根のちりまきいしりぎ能借の初念
只湯互腐お持のり細互け時とくまく甘言又ばねわり
字多束のいじりまて煉掃餘つき節分と密し年忘れ
の大寄せはんをいの仕納め大互に飲ま大互に喰大喰まで
喰つてとくし一年ハ暮にたり

安方の頌

五人のこけちる氣勢驚き有り愚あり有愚と八拍石や
そ承教く或ハ鈍とい破あとい戯事と合れ腑ぬけと
又建ぬともいぬつり厚くやうたれうといハ鈍といハ剛

の字物のまえぬの石破あとい愚の家を破り失れり
小兒のたむれをのびがし腑ぬけハ腑の内種けしそ用たる成
し是ぬといハ智意の不足ぬのりハ細然るといハ厚くやう
とハ并乱忘の字まてまきまわつともみだれる事やのり毎乱の二
字下略しく厚くやうといまど安方の字ハ東西南北の方向を
知れ此安方りあり剛方を安に抑け安方福言き物に色人
味すれた初は知れ憤るべし是き事もかく出むき業
も今今日を道てゆるの若くもくを道るかく金新し
中みふ子も探高と埃鈴の如く云ふいひ志つて居れ

有ても世も由し生るまゝ生て死ぬ時死ぬ天までもう一人
 まよとがめぬ未世直久是言じ不生不滅の浄土に生れぬ
 の苦勞有果又由が受るもいふ安方又とる大福長者も
 波ねがぬままけり智る者智に例され善者志の善者例
 三世の清いなる果報といひて業を天是とゆけ飢死ぬる
 色を来江る谷をいふなるの二人といひ飯田町の長長堀町
 の七を希世の精を希世の善者といふ世の中の人賢者格別
 尋常の人ぬり破お氣を度しけり腐ぬけのたづねりや
 づの持料まといとも上京上生の安方の位に列さればや乃
 学文理のせんてく三綱五常のたとひ川害得失皆己が
 破家者ゆへに河をまわ知川、たまに天下の命言也

舟幽霊の夜

船月のは梅香を吹送る舟のそとをくくくめわて水
 河のゆりやとけふあすをるる河で竹やう後や
 のゆりやとけふあすをるる河で竹やう後や
 内いなるまある舟の年の徳二八年は尼やう粉白く成る
 一と、歳史とてち次神いよばくを海を面いともむきかして

可小童あり 那野神はまを鏡つゝも賞れ酒の島の鳴く土のめり
浮夜さるすくく月くの小てつち有妻の目の長れと一度て垂て
月を毎に結の月のめりあるすも子略懐有のるに何あれて
づれあすちづき自由と不自由とづれ人の好むあや物に
かまふ月也もあがり松舟もやほしめさるる時泣子も耳小
と毎の市中にうはるるしるべき

百鬼行

尼物其時をて化るる有腐妻の懐あるも管と化人男の仕あはる
塔小化の草虫は蝶小化田鼠は鶴と化楠は石に化有海底小化
蛤と化一の草は纏に化鷹は化て鳩とある古足袋古袴は茶

換舞り化す時のあはるる白の糸着て化當年の更共は来り
湯と化娘は姑と化むす子、親に化魚性か家、醫者に化綿入
胃子腹へ給と化下駄童の雪駄童と化るる天氣はゆく胡の燈童
又い神童と化るる言寄妓の返寄女 化るる化の海と化智者
と化馬と化賽と化るる是は事の人の名に化也して人不知ももせは
又大樹の精も化石地蔵も化ると天地のちいつれけりんや狐狸
赤猫河豚の毒の類をよく化るるの上もさるる成り女と化
あはるる化小僧と化あはと化を系・化を財を人かつて化け能
人の魂とくくんとさる極よの化が古舟の大入道足籠 是は陸舟
の隈と見えさるるくくとして思れむとさる世の中の害まては

一、本の身痛と無量の病の生解は面白く又暑も終
 りて御をこし教しるやうの事むくと立て冷水堂也いと暑
 と流るる熱赤れ目すら汗に掛りぬにちしとるのち安か
 の見る目もに替陶しくふくさげ又秋の生解は老れも消えぬ
 秋の下流を重まとい庄の上風身すして虫の音出る夕暮る
 さぞかきむしてさしてさし又秋の老れも消えぬのこに飲こ
 るうづれおと表ある生解ありさう冬の生解はよしおおの降り
 河水引くあまねたすまほしき事所縁さうて是をせえぬ
 川に飲こしとてさうてさうて凡も生解は四季はこし判者
 物の情を知りて御借見え来はし今生解はあて遣てお回す
 付けてんふ本の事すはうらとほしく悪病之甚の事すはうらとほし
 く是し秋の事すは静かして風流のみの事すは奇麗ホして健
 あつとふべー

療病の論

山桓既の官を辞て去るは不病の犬不逢う毛也、秋勝れ口涎
 を流し御情にのあぐり是年の目に向ふ如し桓又て茶をゆて
 むとん病犬が曰吾子足らあんで桓が曰置まは病犬が曰置まわて
 茶をゆて茶をたたくるものうら桓が曰吾置まは病犬が曰置まわて
 茶をゆて、
 山相如字、桓とて置まはし久しう官にせまひ、秋の終す

多病よりして辞し去る病大が曰昔司馬相如筆を楯にためて
 ては浮細るいそりりれ去るも病ありき去るといふ大文吏
 志とざるりかしの如し今吾子目る成と名を同にして同
 かの黄金用を以てしづれの本に場をひすす也又長門を賣
 るは是るの帝又蒲氏が奉主の射せし及び名の名の蒲司馬
 と同じして身僅に二千の下の指食の魚ありかたの字は然して
 身病ありて自ら醫を好め去るも自らの病を治するを得て
 他の病を療せんといふかろくろくろく如く雲の世に陰陽の身の上
 知べとい吾も吾子かろの如くくは是を感氣といふと相白汝が言
 知ざる也とい志とざるりりは是を感氣といふと相白汝が言

むと去られれ又病醫を以てし怔忡候息加るに眼疾を以て
 かいまどい病を治するりりはといふ病能あぐ大病を療し得
 ちまれ身疾の病は治して治しし心神の病はまじりて離怔忡
 眼疾の如き身疾の病之名利は官心神の病之今是を治して
 病の自然するも世を病を脱して足と八蓋のり由まは心を無何有の
 けり道途せむ自ら身疾の病は治ししといふ病大が白はく吾子實
 に自ら心神の病を療し得る去る實病有し余吾子の業を以て
 してといふ病は治し得るを病能あぐ造化のこころは病則
 つるありといひて河中、身を投じぬ

好悪の辨

意地有て口をさすく物ありと

豆腐の賦

豆腐の豆腐とて物有り味淡して清く至切やまき花の葉
 に碎を滑してハ滑豆腐に去く物あり又ハ之依の言者一又富の
 冷湯奴豆腐小暑を忘る秋の月も紅ふとくぬふをと保々の
 香は湯豆腐の香を清く又茶飯の夕ハ田菜の風味あり茶
 の束にてせりのうまき有或ハ人の顔かてハ叔母の及ふ子
 とくと呼ばれて定家等の小倉の谷と称し鎌倉の古村ハ田菜の
 好者とすそり香樂河ぬ屋に孔のくハ八陣を長し八益
 とくハ叔母にぬるの谷も豆腐とて有り有とて早

此ハ紙書とてさきとて海世に公の及ハ南後とてハ
 清江とてハ揚豆腐ハ清江の事とてハ人ハ心とてさきと
 くのこれハ好しとてハ又器とてハ春の目とてハ情
 意ハの好物干てろくせりこれハ花舞ハ代りて精をの菜味
 とてハ清江とてハ清江の事とてハ

自評脚人の説

夫れ陰陽命とてハ物とてハ對する有り天地ハ對上とてハ
 右つり日ハ月ハ對し星ハ辰ハ對し愚ハ對山ハ川ハ海と
 君ハ隣と對し小ハ大ハ對し角ハ丸ハ對し少ハ多ハ對し女ハ男
 對し曲ハ直ハ對し曲ハ直ハ對し曲ハ直ハ對し曲ハ直ハ對し

